

第六章

鎌倉時代の 龜山市域

第一節 鎌倉幕府の成立と鈴鹿郡

第一項 平家一門の滅亡

源範頼・義経軍の上洛 寿永二年(一一八三)十一月、源頼朝の派遣した弟源義経よしつねと中原親能なかはらのちかよしの軍勢五百騎は、美濃国不破関みののくにふわのせき(岐阜県不破郡関ヶ原町)に到着。京都では、源義仲よしなかとともに入京した諸国源氏勢力が徐々に分裂を深め、後白河院ごしらかわと義仲の關係も悪化するなか、同月、義仲が院の御所法住寺殿ほうじゆじどの(京都市東山区)を焼き討ちにする。この間、鈴鹿山での義仲軍と伊勢「国民」の睨みあいも、依然、続いていたであろう(写真102)。

同じ十一月の末、後白河院は、伊勢国に軍を進めた源義経のもとへ、院北面の武士を遣わし、京都の状況を伝え、早期の上洛を要請する。義経は、鎌倉の頼朝へ指示を仰いでから、その返事を待つて攻めのぼると返答する(史397)。その一方で翌十二月、院は義仲の圧力もあり、源頼朝の追討を命じる院庁いんのちよう下文くだしぶみを出した。

年明けて寿永三年(一一八四)正月、続々と西上してきた源頼朝軍は、尾張国おわりのくにの熱田社(名古屋市熱田区)で二手に分かれ、上洛戦が始まる(史399)。

一方の大將は、頼朝の弟源範頼のりより。美濃国不破関を越えて近江国おうみのくに



写真102 上空から見た鈴鹿峠 (デジタル共有図)

(滋賀県)へ入り、勢多せたの唐橋からし(大津市瀬田)を突破して京都をめざす。甲斐源氏の武田信義・小笠原遠

光、下総平氏の千葉常胤など、大武士団が中心の大手（正面部隊）である。

対する搦手（側面部隊）の大将は、源義経。大勢といえるのは甲斐源氏の安田義定くらいで、梶原景時・土肥実平など、大部分は武蔵国（東京都・埼玉県等）と相模国（神奈川県）の中小武士団である。義経軍は、伊勢国の鈴鹿関から加太山を越え、伊賀国柘植（伊賀市柘植町）から木津川水系を下り、山城国宇治（京都府宇治市）を経て京都をめざす。

かくて源範頼・義経軍と源義仲軍は、勢多と宇治で激突。範頼・義経軍が大勝し、義仲は北国へ敗走する途中、近江国粟津（大津市粟津町）で戦死する。一転、後白河法皇は、源頼朝に平家追討を命じる宣旨を出し、翌二月、範頼・義経軍は、摂津国一ノ谷（神戸市須磨区一ノ谷町）あたりまで東上していた平家一門を破るのである（一ノ谷の合戦）。

源頼朝軍の勝利、なかでも搦手たる義経軍の伊勢・伊賀路進軍を可能ならしめたのは、伊勢「国民」との連携であった。そして、鈴鹿山を封鎖して伊勢国内を防禦し、京都を制圧する勢力に対抗するという伊勢「国民」の戦術は、早くも半年後、別のかたちで発揮されることになる。

源義経軍の余燼 一ノ谷の合戦ののち、源頼朝麾下の軍勢が畿内近国を制圧し、各国を管下に置く惣追捕使（のちの守護）が遣わされる。伊勢国における史料上の初見は、山内経俊の在任が確認される文治元年（一一八五）十月まで下る（『吾妻鏡』同月二十三日条）。

とはいえ、西隣の伊賀国では、一ノ谷の合戦の翌月、寿永三年（一一八四）三月に、惣追捕使として大内惟義が派遣されている（『吾妻鏡』同月二十日条）。伊勢国にも、合戦後まもなく、惣追捕使が遣わされたにちがいない。寿永三年三月、大井実春が平家残党の制圧のため、伊勢国に派遣されている（『吾妻鏡』同月二十二日条）。惣追捕使かもしれない。

二カ月後の元暦元年（一一八四）五月には、源頼朝配下の山内経俊・大内惟義・波多野義定・大井実春の家人が、伊勢国のはとりやま羽取山（津市河芸町久知野）に潜伏していた源（志太）よしだ義広をよしひろ攻撃。義広は、東国で源頼朝に敵対し、やがて源義仲に属して、義仲の滅亡後、逃亡していた（『吾妻鏡』同月十五日条。なお、羽取山を伊賀国の服部はつとり（伊賀市服部町）とする『平家物語』諸本の説もある）。惣追捕使かはともかく、一ノ谷の合戦後まもなく、山内経俊らの家人が、伊勢国に派遣されていたことは確実である。

ところで、山内経俊らとともに名を連ねる伊賀国惣追捕使の大内惟義は、かつて伊勢・伊賀国を進軍した源義経軍に編成されていた（史399）。そこで想起されるのが、義経軍に武蔵・相模国の中小武士団が多く編成されていた事実である。義経軍に編成されていた確証はないものの、山内経俊・波多野義定は相模国、大井実春は武蔵国を本拠とする武士である。彼らも、義経軍に編成されていた可能性が高い。

この時期の戦争は、進軍する過程で、敵方の所領を没収しながら進んだ。義経軍が伊勢・伊賀国の通過と併行して敵方の所領を没収し、義仲の滅亡後、かつて義経軍に編成された武士らが、没収した所領を足がかりに、伊勢・伊賀両国に勢力を扶植していく状況が看取される。伊勢・伊賀国を経て上洛した義経軍の編成は、その後の両国支配のありかたと連関するのである。さらに、そうした新入勢力の矛先は、まもなく旧来勢力の「国民」へとむけられることになる。

伊勢・伊賀平氏の乱 元暦元年（一一八四）七月、世間を揺るがす大争乱がおこる。伊勢・伊賀平氏の乱である（史400～408）。鎌倉幕府に反旗を翻したのは、かつて源義経軍の上洛を支援した「小松殿の侍」こと故平重盛たいらのしげもりの郎党をはじめとする伊勢・伊賀国の武士団連合であった（図59）。

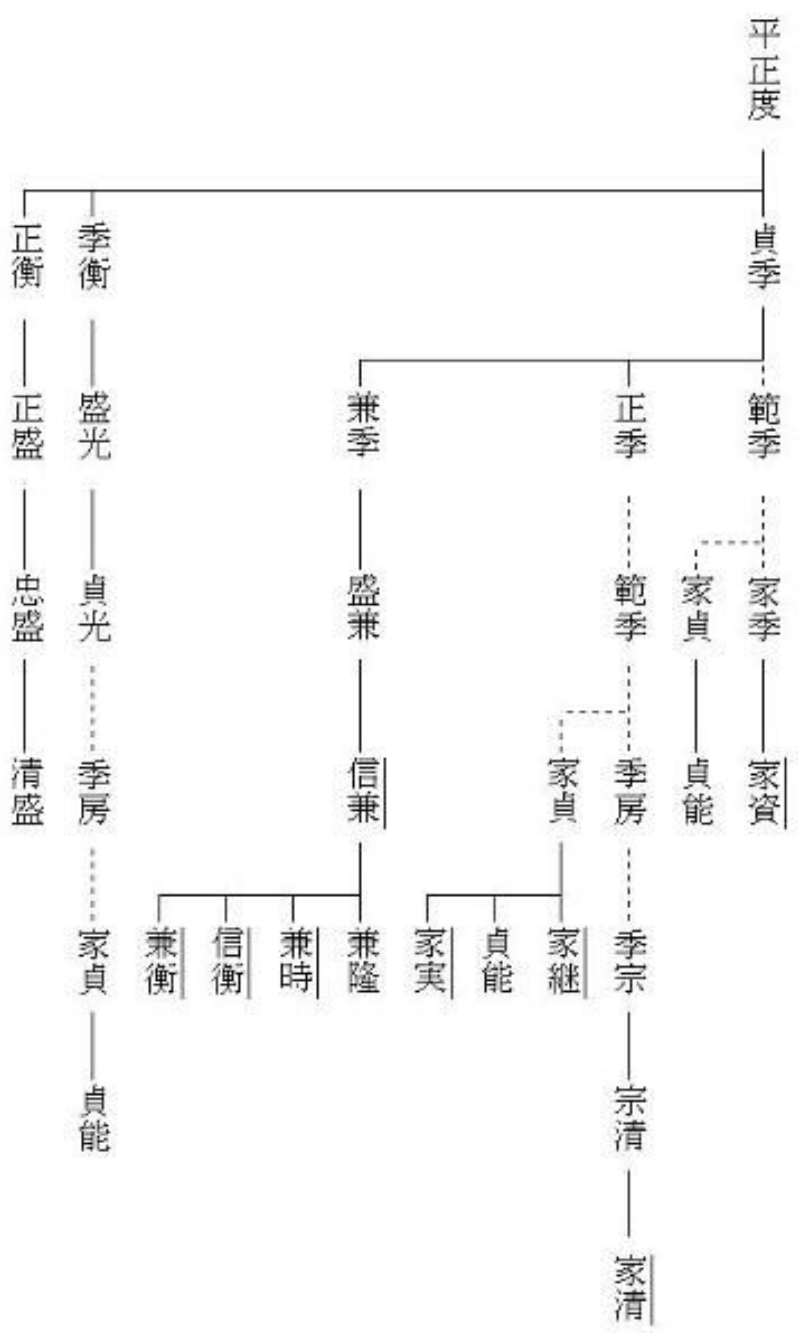
七月七日、平（平田）ひらた家継いえつぐらが、伊賀国で大内惟義の郎党ら

を襲撃。伊勢国では、平家資・家能・家清らが鈴鹿山を封鎖する。これに対し、ややあつて七月十八日、幕府軍の大内惟義・加藤景員・山内経俊らの軍勢が出撃。十九日、幕府軍と反乱軍は、近江国大原荘（甲賀市甲賀町大原）で衝突し、激戦の末に幕府軍が勝利。反乱軍の平家継は梟首され、伊藤忠清と平家資は山中に逃亡する。幕府軍の損害も大きく、近江国の佐々木氏の祖秀義が戦死した。

翌八月には、源義経の軍勢が、伊勢国滝野（松阪市飯南町）の城に立て籠もった平信兼を攻撃。信兼は城を焼き、自害する。諸史料は、乱の当初から平信兼が首謀者であったかのごとく記している。実際、京都や鎌倉には、そうした情報がもたらされていた。だが、それは、どうも誤りだった可能性が高い。

これにさきだつ八月三日、平家継らの敗死の報に接した鎌倉の源頼朝は、平信兼とその息子が消息不明との報告をうけ、京都の源義経に搜索を命じている。そして、八月十日、義経は、信兼の子息兼衡・信衡・兼時を宿所に招き、殺害する。義経が信兼討伐のため、伊勢国に発向するのは、二日後の八月十二日。信兼が乱の首謀者であったとすれば、子息らが義経の宿所へ、

図59 伊勢・伊賀平氏略系図 傍線は伊勢・伊賀平氏の乱の関係者、点線は系譜に諸説のあるものを示す。



不用意に招かれてくるはずもない。噂に乗じて無実を着せられ、平信兼父子は、抹殺されたのである。

ところで『平家物語』諸本は、この乱を、伊勢・伊賀国に残った勢力が西海に遁れた平家一門との好誼を忘れずに挙兵したものと描写する。だが、前述のごとく、乱をおこした両国の武士団連合は、かつて源義経軍と連携し、その上洛に協力していた。東国からの新入勢力によって、徐々に圧迫され、挙兵したというのが真相である。

また『平家物語』諸本のなかには、この乱を「三日平氏」、すなわち三日で鎮圧されたと叙述するものがある。しかし、三日で鎮圧されたのは、二〇年後の元久元年（一二〇四）におこった伊勢・伊賀平氏の乱である。

元暦元年（一一八四）七月の時点で、平家一門は依然、西国で大きな勢力を維持しており、源平両陣営の勝敗は予測できぬ状況にあった。そうしたさなかにおこった伊勢・伊賀平氏の乱は、西国の平家一門から独立し、伊勢・伊賀国に隠然たる実力をもつ武士団連合がおこした、鎌倉幕府勢力の畿内近国支配を覆しかねない大反乱であった。

平家一門の滅亡と源義経の没落 寿永三年（一一八四）二月、一ノ谷の合戦で敗北した平家一門は、讃岐国屋島さぬきのくにやしま（香川県高松市）に拠点を構え、反攻の機会をうかがっていた。九州方面には、なお平家一門を支援する勢力も多く、元暦元年（一一八四）九月に西国へ派遣された源範頼軍の苦戦が続いていた。

元暦二年（一一八五）正月、しびれを切らした源義経は、軍勢を率いて西国へ発向。翌二月、屋島で平家一門を破る。そして、三月、長門国壇ノ浦ながとのくにだん（山口県下関市壇之浦町）での最終決戦は、源氏方が勝利。八歳の安徳天皇あんどくは入水し、平家一門は滅亡する。四月、鎌倉の源頼朝は、勝利を報じる巻物を手にすると、近隣の鶴岡八幡宮つるがおかの方をむき、しばらく無言で座っていたという（『吾妻鏡』同月十一日条）。伊豆国いずのくに（静岡県）の流人

となつてから、四半世紀。その心中、いかばかりであつたか。五月には、伊勢・伊賀平氏の乱以来、逃亡していた伊藤忠清が捕まり、京都の六条河原で処刑される（史409〜412）。実際は、加藤光員みつかずの郎党が志摩国麻生浦しまのくに おうのうら（鳥羽市浦村町）で捕縛したらしいが、京都では、鈴鹿山で捕まつたとの説も流れた。伊藤氏と鈴鹿山周辺の関係の深さがうかがわれる。

こののち、後白河院に接近した京都の源義経と、鎌倉の兄頼朝の関係は悪化。文治元年（一一八五）十月、義経は叔父源行家ゆきいえとともに、後白河に頼朝追討を命じる宣旨せんじを出させ、挙兵する。このとき、義経の使者が伊勢国の山内経俊の宿所を急襲したともいう（『吾妻鏡』同月二十三日条）。だが、義経らに呼応する武士はおらず、院から義経は九国地頭、行家は四国地頭に任じられて、西国での再起をめざす。ところが、義経は摂津国大物浦だいまつうら（兵庫県尼崎市大物町）で嵐に遭い、紆余曲折の末、奥州藤原氏のもとへ落ちのびていくことになる。

『源平盛衰記』によると、源義経の郎党伊勢義盛いせよしもりは、義経の逃亡が成つた暁には参上すると約したうえで、義経に暇を乞い、故郷伊勢国に下つて「時の守護人首藤四郎すどう」（山内俊綱としつなか）と一戦を交え、大勢に押されると鈴鹿山に籠もつて戦い、自害したという（史413）。文治二年（一一八六）七月ごろの話である（『玉葉』同月二十五日条）。

『平家物語』諸本には、もともと伊勢義盛は、鈴鹿山周辺で山賊をして妻子を養っていたという叙述がみえる。しかし、近年では、義盛は伊勢平氏の出身で、義経軍が伊勢国を経て上洛する際に、義経の従者になつたとの説も出されている。『源平盛衰記』の叙述や近年の説が事実だとすれば、伊勢義盛は、故郷伊勢国の同族を殲滅した東国勢力と、最後の一戦を交えたということになる。

第二項 鎌倉時代初期の鈴鹿郡

文治の国地頭勅許 後白河院が源義経・行家に源頼朝の追討を命じたことは、法皇にとって大きな負い目となった。このとき、頼朝が後白河を「日本国第一の大天狗」と揶揄したことは、つとに有名である。したたかな頼朝の巻き返しが始まる。

文治元年（一一八五）十一月、源頼朝の舅北条時政ほうじょうときまさが千騎を率いて上洛。後白河院は、一転して源義経・行家の追討を命じる宣言を出す。そして、このとき北条時政は、頼朝の内意を受け、法皇に重大な要求を突きつける。

この文治元年十一月、北条時政の申請にもとづき、後白河院が源頼朝に許可した内容は、古来「文治の守護・地頭勅許」として理解されてきた。源義経・行家の搜索を名目に、国ごとに守護、郡・郷・荘といった荘園公領しょうえんこうりょうごとに地頭の設置が許可された、との理解である。このうち荘園公領ごとにおかれた地頭を、研究上、荘郷地頭しょうじょうという。

だが、現在では、このとき設置を許されたのは、守護でも荘郷地頭でもなく、国ごとに設置された地頭、すなわち国地頭くにじとうであったとの見解が有力である。設置範囲は、鎌倉幕府勢力の新たな占領地たる畿内近国以西の西国で、すでに幕府が実力支配していた東国はふくまれない。

そして、何より国地頭は、その職権に重大な内容をふくんでいた。第一に、荘園か公領かを問わず、各国から田地一反あたり五升の兵糧米を徴収する権限（一反は、約三四m四方）。第二に、各国の田地を知行する権限（勸農権かんのう）である。勸農とは、農民に田地を割りあて、種子・農料を貸しつけ、荘園公領の農業生産を支える機能で、本来、荘園では荘園領主や荘官、公領では国司や国衙こくがざい在庁官人いちやうかんじんが職務を担っていた。

つまり、新たに国地頭が赴任しても、荘園公領における勸農や兵糧米の徴収は、これまで勸農を担ってきた荘園領主や荘官、それに国司や国衙在庁官人の協力なしには、不可能なのである。ゆえに、国地頭の設置とは、そうした諸国における旧来の行政組織を、そのまま国地頭の指揮下に入れること、すなわち鎌倉幕府の支配下に編入することを意味する。国地頭の設置は、古代律令体制以来の、この国の支配体系を根底から覆す可能性を秘めていた。

とはいえ、未曾有の強い権限をもつ国地頭の設置が、ほどなく列島を大混乱に巻きこむことは、必至だった。果たして兵糧米徴収や勸農をめぐる諸国からの苦情が、発足後まもなく鎌倉幕府へ殺到する。結局、文治二年（一一八六）三月、北条時政は、自身の手にあった七カ国の国地頭を返上。同年六月、源頼朝は国地頭制の廃止を後白河院に奏請する。

その結果、国ごとには、おもに軍事警察権を職権とする惣追捕使（のちの守護）が残される。対して地頭は、荘園公領ごとに置かれた荘郷地頭のみが存続する。以後、守護と荘郷地頭という二つの制度が、鎌倉幕府の職制として確立していくことになるのである。

鎌倉幕府勢力の進出 平家一門の滅亡により、一門とその余党の旧領、いわゆる平家没官領へいけもつかんりょうは、源義仲・行家の手を経て、最後は源頼朝の手中に帰する。そして、やがて頼朝は、そのうちの上級領主職しきを預所あずかりどころ、郡・郷司や下司などの下級領主職を荘郷地頭というかたちで、御家人らに給付していくことになる。平家没官領の内容は、後白河院から頼朝のもとへ送られた平家没官領注文ちゆうもんという巻物に記されていた。

一方、伊勢国における荘郷地頭のなかには、平家没官領注文に載せられたのとは、別の経緯で設置されたものもある。元暦元年（一一八四）七月の伊勢・伊賀平氏の乱後、源頼朝は、御家人加藤光員を伊勢国に遣わし、残党の搜索とその旧領の調査

を命じた。光員は、旧領の調査結果を「光員注文」とよばれる文書に記し、頼朝に報告する（『吾妻鏡』文治三年六月二十日条）。

そして、元暦二年（一一八五）六月、西国で荘郷地頭の設置が始まる。その初見は伊勢国で、島津忠久の波出御厨（比定地不明）と須可荘（松阪市嬉野須賀町）の地頭職補任である。これらの所領は、伊勢・伊賀平氏の乱で敗死した平信兼の余党の旧領であった（『平安遺文』四二五九・四二六〇号）。いずれも「光員注文」に載せられた所領であろう。こののち百五十年間、鎌倉幕府による西国支配の根幹をなすことになる荘郷地頭制の整備は、伊勢・伊賀平氏の乱の戦後処理から緒につくのである。

そして、これ以後、荘郷地頭が次々と設置される。文治三年（一一八七）四月、伊勢神宮公卿勅使に対して雑事を勤めぬ荘園を書き記した目録には、各所領の領主名がみえる（史416）。
昼生荘（下庄町・中庄町等）の預所中原親能、遍法寺領（辺ひるおのしやう）
法寺町）の地頭大江広元、英多荘（川崎町）の地頭山内経俊、三子山（関町坂下）の地頭伊佐資綱などである。中原親能と大江広元は、京下り官人として源頼朝の覇業を支えた側近中の側近。山内経俊は、伊勢国守護である。

このほか、鎌倉時代初期の伊勢神宮領を書き連ねた史料には、鈴鹿神戸（野村町・山下町・木下町・小野町・布気町・太岡寺町等）、安濃田御厨（阿野田町）、昼生御厨（下庄町・中庄町等）、原御厨（能褒野町）などがみえる（史422）。このうち原御厨については、「平家の相伝往代をもって勅免不輸の庄領なり」（中略）いま没官所として、鎌倉、知行せらるるところなり」とある。平家領が没収されて源頼朝の所領、すなわち関東御領（幕府直轄領）となったのである。

三日平氏の乱 鎌倉幕府の支配が徐々に展開するなか、伊勢国で大きな事件がおこる。元久元年（一二〇四）三月、幕府から

京都守護として派遣されていた平賀朝雅ひらがともまさの飛脚が、鎌倉へ到着した。伊勢・伊賀平氏の残党が、二〇年ぶりに蜂起したとの一報である。

まず、鎌倉幕府が編さんした『吾妻鏡』により、乱の経過をみる。二月、平維基たいらのこれもとの子孫が伊賀国で、平度光のりみつの子息らが伊勢国で蜂起。両国の守護山内経俊は、無勢により逃亡し、二カ国の軍勢は、鈴鹿山と八峰山はつぶう（三重郡菰野町八風峠）を封鎖した。

これをうけ、幕府は、京都守護平賀朝雅に乱の鎮圧を命令。

三月二十三日、朝雅は京都を出立した。ところが、鈴鹿関が封鎖されていたため、朝雅軍は美濃国を経て伊勢国に入り、四月十日から三日間、合戦する。まず、朝明郡の富田とみたの館（四日市市富田）に富田基度もとのりを襲い、基度と弟松本盛光まつもともりみつらを誅伐。続いて安濃郡の岡貞重おかさだしげ一党を攻撃し、さらに多気郡の庄田しやうだすけふさ佐房父子を攻め、勝利する。三日平氏の乱とよばれるゆえんである。

とはいえ、『吾妻鏡』によれば、その後も戦闘は続く。四月二十九日、平賀朝雅は、伊勢国六ヶ山（比定地不明。あるいは伊賀国六箇山むこやま（名張市）か）に城郭を構えた平盛時もりとき父子を破り、ひなが日永（四日市市日永）・若松南村わかまつみなみむら（鈴鹿市若松）・高角たかつの（四日市市高角町）・小野おの（関町小野・小野町）に城郭を構えた反乱の「張本」若菜五郎わかなも、小野で戦死した（なお、関町小野の西隣、同町木崎の北方の丘陵には、三日城みつかじょうの小字が残る）。以上が『吾妻鏡』が描く乱の経過である（史431）。

だが、後代に編纂された『吾妻鏡』と、他の同時代史料の記載には、大小さまざまな齟齬がある。たとえば、同時代史料によれば、平賀朝雅が出京する以前の三月二十一日には、尾張・美濃国の幕府軍と、伊勢国の反乱軍の戦闘が、すでに始まっていた形跡がある。のみならず、平賀朝雅の帰洛は、その実、四月二日のことであった。また、朝雅の出京時の軍勢二百騎に対して、帰洛時は千余騎に増えている（史432～435）。

これらの情報を総合するに、おそらく乱は、尾張・美濃国の幕府軍と、伊勢国の反乱軍の戦闘で始まり、幕府軍の勝利に終わりつつあるところに、京都から平賀朝雅軍が到着。結果、朝雅は大した戦闘もせず、すぐに尾張・美濃国の軍勢を率いて帰洛した、というのが真相ではなからうか。戦闘が四月末まで続いたかのごとく、また、それらをすべて平賀朝雅の軍功であるかのように『吾妻鏡』が記すのは、同書に時折みられる曲筆、ないし誤解の結果か、もしくは尾ビレのついた朝雅の報告を、そのまま記録したのかもしれない。

それはともかくも、戦功によって、平賀朝雅は、幕府から伊勢・伊賀国の守護に任命される。また、朝廷からは、幕府御家人としては異例の右衛門佐に任じられるなど、京都でも地位を急速に上昇させるのである。

ところが、元久二年（一二〇五）閏七月、平賀朝雅は、彼を四代将軍に擁立しようとした北条時政の陰謀に荷担したとして、京都で誅滅。初代将軍源頼朝は、建久十年（一一九九）正月に没し、二代頼家よりいえは建仁三年（一二〇三）九月に失脚。三代実朝さねともには、跡継ぎがなかった。その後継候補者であった平賀朝雅の没落により、伊勢・伊賀国守護の地位は、かつて伊賀国守護であった大内惟義の子惟信これのぶへと引き継がれることになる。

とまれ、十世紀以来の地元の生え抜き、伊勢平氏による抵抗は、ここに終わる。